若菜のうち

泉鏡花

春の山——と、優に大きく、申出(もうしい)でるほどの事ではない。われら式のぶらぶらあるき、彼岸(ひがん)もはやくすぎた、四月上旬の田畝路(たんぼみち)は、些(ち)とのぼせるほど暖(あたたか)い。修善寺(しゅぜんじ)の温泉宿、新井(あらい)から、——着て出た羽織(はおり)は脱ぎたいくらい。が脱ぐと、ステッキの片手の荷になる。つれの家内が持って遣(や)ろうというのだけれど、二十か、三十そこそこで双方容子(ようす)が好(い)いのだと野山の景色にもなろうもの……紫末濃(むらさきすそご)でも小桜縅(こざくらおどし)でも何でもない。茶縞(ちゃじま)の布子(ぬのこ)と来て、菫(すみれ)、げんげにも恥かしい。……第一そこらにひらひらしている蝶々(ちょうちょう)の袖(そで)に対しても、果報ものの狩衣(かりぎぬ)ではない、衣装持(いしょうもち)の後見(こうけん)は、いきすぎ

よう。
汗ばんだ猪首(いくび)の兜(かぶと)、いや、中折(なかおれ)の古帽を脱いで、薄くなった折目を気にして、そっと撫(な)でて、杖(つえ)の柄(え)に引っ掛けて、ひょいと、かつぐと、
「そこで端折(はしょ)ったり、じんじんばしょり、頬かぶり。」
と、うしろから婦(おんな)がひやかす。
「それ、狐がいる。」
「いやですよ。」
何を、こいつら……大みそかの事を忘れたか。新春の読(よみ)ものだからといって、暢気(のんき)らしい。
田畑を隔てた、桂川(かつらがわ)の瀬の音も、小鼓(こつづみ)に聞えて、一

方、なだらかな山懐（やまふところ）に、桜の咲いた里景色（さとげしき）。

薄い桃も交（まじ）っていた。

近くに藁屋（わらや）も見えないのに、その山裾（やますそ）の草の径（みち）から、ほかほかとして、女の子が――姉妹（きょうだい）らしい二人づれ。……時間を思っても、まだ小学校前らしいのが、手に、すかんぼも茅花（つばな）も持たないけれど、摘み草の夢の中を歩行（ある）くように、うっとりとした顔をしたのと、径（みち）の角で行逢（ゆきあ）った。

「今日（こんち）は、姉（ねえ）ちゃん、蕨（わらび）のある処（ところ）を教えて下さいな。」

肩に耳の附着（くっつ）くほど、右へ顔を傾けて、も一つ左へ傾けたから、

「わらび――……小さなのでもいいの、かわいらしい、あなたのような。」

この無遠慮な小母(おば)さんに、妹はあっけに取られたが、姉の方は頷(うなず)いた。

「はい、お煎餅(せんべい)、少しですよ。……お二人でね……」

お駄賃(だちん)に、懐紙(かいし)に包んだのを白銅製のものかと思うと、銀の小粒で……宿の勘定前だから、怪しからず気前が好い。

女の子は、半分気味の悪そうに狐に魅(つま)まれでもしたように掌(てのひら)に受けると――二人を、山裾(やますそ)のこの坂口まで、導いて、上へ指さしをした――その来た時とおん

なじに妹の手を引いて、少しせき足にあの径（みち）を、何だか、ふわふわと浮いて行（ゆ）く。……

さて、二人がその帰り道である。なるほど小さい、白魚（しらうお）ばかり、そのかわり、根の群青（ぐんじょう）に、薄く藍（あい）をぼかして尖（さき）の真紫（まむらさき）なのを五、六本。何、牛に乗らないだけの仙家（せんか）の女（め）の童（わらわ）の指示（しめし）である……もっと山高く、草深く分入（わけい）ればだけれども、それにはこの陽気だ、蛇体（じゃたい）という障碍（しょうげ）があって、望むものの方に、苦行（くぎょう）が足りない。で、その小さなのを五、六本。園女（そのじょ）の鼻紙の間に何とかいう菫（すみれ）に恥よ。懐にして、もとの野道へ出ると、小鼓は響いて花菜（はなな）は眩（まばゆ）い。影はいない。——彼処（かしこ）に、

路傍（みちばた）に咲き残った、紅梅（こうばい）か。いや桃だ。……近くに行ったら、花が自（おのずか）ら、ものを言おう。

その町の方へ、近づくと、桃である。根に軽く築（つ）いた草堤（くさづつみ）の蔭から、黒い髪が、額（ひたい）が、鼻が、口が、おお、赤い帯が、おなじように、揃（そろ）って、二人出て、前刻（せんこく）の姉妹（きょうだい）が、黙って……襟肩（えりかた）で、少しばかり、極りが悪いか、むずむずしながら、姉が二本、妹が一本、鼓草（たんぽぽ）の花を、すいと出した。

「まあ、姉（ねえ）ちゃん。」

「どうも、ありがとう。」

私も今はかぶっていた帽を取って、その二本の方を

慾張った。

とはいえ、何となく胸に響いた。響いたのは、形容でも何でもない。川音がタタと鼓草を打って花に日の光が動いたのである。濃く香しい、その幾重の花葩の裡に、幼児の姿は、二つながら吸われて消えた。

……ものには順がある。——胸のせまるまで、二人が——思わず熟と姉妹の顔を瞻った時、忽ち背中で——もお——と鳴いた。

振向くと、すぐ其処に小屋があって、親が留守の犢が光った鼻を出した。

——もお——

濡れた鼻息は、陽炎（かげろう）に蒸されて、長閑（のどか）に銀粉（ぎんぷん）を刷（は）いた。その隙（ひま）に、姉妹（きょうだい）は見えなくなったのである。桃の花の微笑（ほほえ）む時、黙って顔を見合せた。

子のない夫婦は、さびしかった。

おなじようなことがある。様子はちょっと違っているが、それも修善寺で、時節は秋の末、十一月はじめだから、……さあ、もう冬であった。

場所は――前記のは、桂川（かつらがわ）を上（のぼ）る、大師（だいし）の奥の院へ行く本道と、渓流を隔てた、川堤の岐路（えだみち）だった。これは新停車場（しんていしゃじょう）へ向って、ずっと滝の末ともいおう、瀬の下で、大仁通（おおひとがよ）いの街道を傍（わき）へ入って、田畝（たんぼ）の中を、小

路へ幾つか畝(うね)りつつ上(のぼ)った途中であった。

上等の小春日和(こはるびより)で、今日も汗ばむほどだったが、今度は外套を脱いで、杖の尖(さき)には引っ掛けなかった。行(や)ると、案山子(かかし)を抜いて来たと叱られようから。

婦(おんな)は、道端の藪(やぶ)を覗(のぞ)き松の根を潜(くぐ)った、竜胆(りんどう)の、茎の細いのを摘んで持った。これは袂(たもと)にも懐にも入らないから、何に対し、誰(たれ)に恥ていいか分らない。

「マッチをあげますか。」

「先ず一服だ。」

安煙草(やすたばこ)の匂(におい)のかわりに、稲の甘い香(か)が耳まで包む。日を一杯に吸って、目の前の稲は、とろとろと、垂穂(たりほ)

で居眠りをするらしい。向って、外套の黒い裙と、青い褄で腰を掛けた、むら尾花の連って輝く穂は、キラキラと白銀の波である。預けた、竜胆の影が紫の灯のように穂をすいて、昼の十日ばかりの月が澄む。稲の下にも、薄の中にも、細流の囁くように、ちちろ、ちちろと声がして、その鳴く音の高低に、静まった草もみじが、そこらの刈あとにこぼれた粟の落穂とともに、風のないのに軽く動いた。

麓を見ると、塵焼場だという、煙突が、豚の鼻面のように低く仰向いて、むくむくと煙を噴くのが、黒く

もならず、青々と一条立騰って、空なる昼の月に淡く消える。これも夜中には幽霊じみて、旅人を怯かそう。——夜泣松というのが丘下の山の出端に、黙った烏のように羽を重ねた。

「大分上ったな。」

「帰りますか。」

「一奮発、向うへ廻ろうか。その道は、修善寺の裏山へ抜けられる。」

一廻り斜に見上げた、尾花を分けて、稲の真日南へ——スッと低く飛んだ、赤蜻蛉を、挿にして、小さな女の児が、——また二人。

「まあ、おんなじような、いつかの鼓草（たんぽぽ）のと……」

「少し違うぜ、春のが、山姫のおつかわしめだと、向うへ出たのは山の神の落子（おとしご）らしいよ、柄（がら）ゆきが——最（もっと）も今度の方はお前には縁（えん）がある。」

「大ありですね。」

と荒びた処（ところ）が、すなわち、その山の神で……

「第一、大すきな柿を食べています。ごらんなさい。小さい方が。」

「どッちでも構わないが、その柿々をいうな、というのに——柿々というたびに、宿のかみさんから庭の柿のお見舞が来るので、ひやひやする。」

「春時分は、筍（たけのこ）が掘って見たい筍が掘って見たいと、御主人を驚かして、お惣菜（そうざい）にありつくのは誰さ。……ああ、おいしそうだ、頬辺（ほっぺた）から、菓汁（つゆ）が垂れているじゃありませんか。」

横なでをしたように、妹の子は口も頬も——熟柿（じゅくし）と見えて、だらりと赤い。姉は大きなのを握っていた。

涎（よだれ）も、洟（はな）も見える処（ところ）で、

「その柿、おくれな、小母（おば）さんに。」

と唐突（だしぬけ）にいった。

昔は、川柳（せんりゅう）に、熊坂（くまさか）の脛（すね）のあたりで、みいん、みいん。で、薄（すすき）の裾（すそ）には、蟋蟀（こおろぎ）が鳴くばかり、幼児（おなさご）の目に

は鬼神（きじん）のお松だ。

ぎょっとしたろう、首をすくめて、泣出（なきだ）しそうに、べそを掻いた。

その時姉が、並んで来たのを、衝（つ）と前へ出ると、ぴったりと妹をうしろに囲うと、筒袖（つつそで）だが、袖を開いて、小腕で庇（かば）って、いたいけな掌（てのひら）をパッと開いて、鏃（やじり）の如く五指を反らした。

しかして、踏留（ふみと）まって、睨（にら）むかと目をみはった。

「ごめんよ。」

私が帽子を取ると斉（ひと）しく、婦（おんな）がせき込んで、くもった声で、

「ごめんなさい、姉（ねえ）ちゃん、ごめんなさい。」

二人は、思わず、ほろりとした。

宿の廊下づたいに、湯に行（ゆ）く橋がかりの欄干（らんかん）ずれに、その名樹（めいじゅ）の柿が、梢を暗く、紅日（こうじつ）に照っている。

二羽。

「雀がいる。」

その雀色時（すずめいろどき）。

「めじろですわ。」

底本：「鏡花短篇集」岩波文庫、岩波書店
　　1987（昭和62）年9月16日第1刷発行
　　2001（平成13）年2月5日第21刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第二十七巻」岩波書店
　　1942（昭和17）年10月初版発行
初出：「大阪朝日新聞」
　　1933（昭和8）年2月5日
入力：門田裕志
校正：米田進、鈴木厚司
2003年3月31日作成
青空文庫作成ファイル：